通信第８３号　釈迦如来から弥勒菩薩へのお呼びかけ

　令和七（２０２５）年の長仁寺報恩講は格別に後味のよい報恩講でした。先ず、嬉しかったのは総代さんが最後のご挨拶で「我々は先祖で止まっていた、これから本腰で聞いて行きましょう」と呼びかけて下さったことです。準備の時から、皆さん活気があって率先して与えられた仕事をされていました。そしてきちんと聞法の座に座って下さいました。また、外から来られた同行さん達との融合もあり温かい雰囲気でした。夜の座にもご参詣が多くて予想外のことでした。お月忌に行くと、「四年後はこの世におるか分からんから、一生懸命に勤めさせて頂いた」との声が聞かれました。

　私においても有難い驚きがありました。三願転入の親鸞さまのお教えについて、一般には十九願（教法も聞く姿勢も自力的）から二十願（教法は他力、聞く姿勢が自力）そして十八願（教法も他力、聞く姿勢も他力）に転入するという道筋ですが、藤谷秀道先生は十九願から十八願に出遇うことを「直入の信」といわれ、そこにいつしか自我の毒がついて二十願に転落する。しかし、また二十願から十八願に出遇っていく歩みを「転入の信」とお教え下さっていました。

私は二十五才から二十七才の時に藤谷先生にご縁を頂きました。そこが聞きたかったと喜んでいました。あれは直入の信の世界だったことが見えてきます。大石先生に出遇って転入の信のお育てを受けて来たのです。同じ十八願の世界を感じていましたがようやく一つにならされました。藤谷先生の本を拝読させて頂いても若い時と今回とではまるで響きがちがいます。藤谷先生もそこを願っておられたのかと初めてお遇いできた感があります。時機が純熟しないと仏語は響いて来ないことを改めてしらされます。

　私は求道の第一の関所、世間から出世間の第一地から、第七地までの在り方とそこに出て来る七地沈空の難を超えた第八へ飛躍するところを第二の関所として来ました。藤谷先生はそうではありませんでした。

　　　　二つの関所

　　　菩薩階位の四十一位から四十七位までは自分（自利）が多くて他分（利他）が少なく、四十八位から五十一位までは自分（自利）が少なく他分（他利）が多い。四十一位の初歓喜地から四十七位の七地までは自分が多く他分が少ないので煩悩が邪魔になり仏法の有難さが少ない。喜びは少しあるが喜んでいようとすると骨が折れる。少し喜びがあると自慢したくなる。

　　　仏法の第一の関所は初歓喜地、四十一位をいただくところで、ここは教化で破れる。教行信証でいうと行の巻で、念仏で助かり、四十一位は信心歓喜である。

　　　第二の関所は五十一位、の世界に出るところで教化では絶対に破れない。聞いても聞いてもどうにもならぬ我が身の姿に気づき、仏が下りてきて下さる他力の念仏で救われる。教行信証でいうと信の巻で「しばらく疑問をいたしてついに明証をだす」とあるところであり、第五十一位はである。また証の巻で浄土の姿がハッキリしてくる。

　　　四十一位は浅い心の歓喜で方便、五十一位は深い心の歓喜で真実ともいえる。真実だから二十願が絶対出ないようになります。～～～

　　　疑いの闇ということがよくいわれるが、教化で破れた疑いの闇は薄紙一枚の疑いではない。ほとんど最高のところに上がりつめて薄紙一枚の疑いが出る。罪の重いもの、障りの重いもの、煩悩の絶え間なく起こって来るのが人間、それが人間の本質だが、そこまで上りつめてまだどうしても解決できないものを持っている私。仏の見ておられる本当の私のすがたがこれであったか、それなるが故に「我が国に生れよ、無条件で救う」というのが弥陀の本願。そして釈迦如来は弥勒菩薩に「お前はまだ凡夫である、薄紙一枚残しているぞ」といわれた。

　　　たしなんでいこうと思った下から昔のくせが出る。勝手、気まま、うぬぼれ、これが出ると苦しくなりこれではいかんと気づいた人が後生の一大事と、自分の罪の深さと仏の大悲の深さを大声で口に出し、「仏の国に生れよ」との如来の叫び声を聞き、薄紙一枚が残っている我が身を決定する。薄紙一枚残っている我が身の決定が薄紙一枚の問題を解決したのである。罪と障りが付いて残っていたどうにもならない私が徹底したから、今まで聞いたことのない「仏の国に生れよ」の仏の叫びを聞いたのです。

　　　　還相廻向の徳

　　　十八願の心の上にいただいた深い信は一切衆生を代表して聞いたもの故、聞かない人の心が私の心の中に姿を変えて出て来る。その出て来たものが一つ一つ本願の中に溶けてゆくのが還相回向です。初歓喜地を通り、七地を通り、四十八、九、五十位を通って、五十一位の等覚、弥勒の世界に到ると、罪を消し失わずして皆ことごとく善に変えられる。

　　　弥勒菩薩はにおられるがそこは知足天といって足るを知る世界である。信の上の生活においてはじめて足ることを知る。信がなければ何もかも不足だらけである。五十一位は弥勒の信心の姿であって、人間の迷いの奥底と法性の誠のありたけを知らせていただく。

　　　弥勒菩薩こそ還相回向の徳を持っておられることがこれまでなかなかわからなかった。還相回向は死んでからも大切だが信心の行者は五十一位、弥勒の位に入るとすぐ還相回向の徳がつく。従来真宗の学問は弥勒菩薩と信心の行者は違うのだということばかり話し、弥勒の世界を遠くに眺めて来たが、も弥勒菩薩も遠い世界ではなく人間生活に近いところにある。親鸞聖人お一人が弥勒菩薩を我が身に受け取られ、このことに気づかれました。

　　　釈尊は真如を聞く仏法の最後の仕上げとして南無阿弥陀仏の説法をされたのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤谷秀道著　『教行信証の道標Ⅲ』九十二頁　白馬社

　大無量寿の下巻の終わりに弥勒菩薩に釈尊が呼びかけられるお心を藤谷先生は身を通してお教え下さって

おられたのです。全く私には聞こえていませんでした。恥ずかしく、申し訳ないと同時に本のお陰、文字の

お陰で時機が来たときにこうして届いてくださる事がありがたいです。経典も同じことでありましょう。

　法要にも時機が熟されず全くご参詣されないご門徒さんもおられます。また、おこと付けだけされて帰ら

れる方もいます。法座でも熱心に参加していた人が急にお参りされなくなる人もあります。

つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることあるをも、師にそむきて、ひとに連れて念仏すれば、往生すべからざるなんどということ、ふかせつなり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすがえすもあるべからざることなり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　歎異抄第六章

何か行き違いなどによってもつれが生じます。話せば解決するかと言うとそうでもない場合が多くありま

す。離れたくなくても離るべき縁となれば離れるし、離れたくても離れる縁がこなければ離れられません。一人ひとりの聞法姿勢であります。本願道場もそういうことがあります。人間関係ばかりではありません。死がそうであります。私たちのはからいを超えています。問題はどうなろうと自分が何をよりどころとして生きてゆくかであります。道が決まっていないといつまでも執着して前進がありません。大石先生の「どうなろうとこの道一つ」（樹心社刊）という本がありますが、一筋の道をひたすら歩いてゆくという姿勢を育てて頂いたご恩は三世を超えたご恩であります。

さて、今年は遠くから泊りがけのご同行さんがおられました。二十五日から二十七日まで岐阜から森はる美さんが来られました。二十六日から新潟県から義彦さんが来られ、そのまま二十九日の岐阜、田中本願道場、森本願道場。三十日、三重松林寺本願道場と同道されました。森はる美さんはいったん帰られてすぐに岐阜からまた合流されました。強行スケジュールなのですがあまり疲れないのが不思議でした。私はがはがされ、新世界が現れてくるような感覚で法話をさせて頂きました。

　渡邊さんは「退一歩」と言う言葉が響いたそうです。何時もこちらから自分を押し立てて出る自力の生活をしているのが私達凡夫の有様です。不退転とは、退くことなくどこまでも突き進んでいくように受け取りがちです。しかし、一歩下がる、退く、引いて見ると風景が変わって見えてきます。聞法によって浄土の風光、如来さまのお育ての世界と見るを育てて頂くのであります。歎異抄の十二章には「（言い争い、理論闘争）のところにはもろもろの煩悩おこる、智者遠離すべし」とあります。「負けて信を取れ」と言う教えもあります。私はお月忌まいりで苦手な人がいました。言葉尻を捕まえてはすぐに言い返すのです。よほど気を付けていてもひっくり返す言動をされます。しかも長い時間粘るのです。後味の悪い期間が十年以上続きました。ある時「この方は言葉でなく心の底で何を求めているのだろう」と一歩引いてみつめますと「聞いてくれ」と叫んでいるようでした。それから理屈で返したり、御機嫌を取ったり、良し悪しで対応するのでなく、退一歩して聞かせて頂くようにならされました。すると「有難うございました」と、満足そうに送りだしてくれるようになりました。相手の目的、願いが見えるということはやはり聞法のご利益でありましょう。渡邊さんから「これから大石先生のご書信を拝読していきます」とのお礼のメールを頂きました。

森はる美さんは「聞いてもざるに水を入れるようにすぐわすれてしまいます。と蓮如上人に同行さんが言われた時、蓮如様はそのざるを水につけよとおおせられたように、この度はざるを水の中にいれたように続けて聞かせて頂き、報恩講の時はボヤっと感じたことがだんだんはっきりしてきました。それと高校時代に藤谷先生のご法話を聞かせて頂いた時、さっぱりわからんのに不思議に感動しました。今回あらためてああ、これだったのかという感じです。いよいよこれから聞かせて頂きます」と言って頂きました。

　一人ひとりの業が違うように、それぞれの法座の業が違います。リモート法座もそうであります。聞光道に必ずご出席される新開智英さんが師と仰ぐ松塚先生に「君の行っている法座はいつも何人ぐらいいるかね」とたずねられて「七人か、八人くらいです」と答えたら、喜んでおられたと聞きました。それを聞いて私もうれしかったです。どこか大衆受けという私に野心が付きまとっていたのが絶ち切られて、いよいよ歩まされる道が定められたことであります。

　三重の本願道場からの帰り道、新幹線の中でかねて楽しみにしていた「和英対照仏教聖典」・仏教伝道協会刊を開きました。以前、ホテルに泊った時に置いてあった本でした。何気なく開いて見ますと

　　六年間の苦行を捨てて、へたり込んで最後の苦闘があり、その戦いも終わりを遂げて、夜明けを迎えて明けの明星を仰いだとき、太子の心は光輝き、さとりは開け、仏と成った。それは太子三十五歳の年の十二月八日の朝のことであった。

と、向こうからの世界が釈尊のおさとりと通じていることを感じさせられましたので帰って注文して取り寄せたのです。ご法座のすぐ後と言うこともありましょうが素読しているだけで心が安らぎます。四十二か国語にも翻訳されているようです。外国の方たちとのご縁にもなりそうです。昨日読み終えて、編集の先生方の中に坂東性純先生のお名前があり驚きました。

　大谷大学に入ってすぐ、なぜか先生とお遇いして、食事に誘っていただきました。ビールを御馳走になり、ハワイのたばこを頂きました。なぜなのかわかりませんでした。その後、私は先生の願いを裏切り、サッカーに逃げて学校にも行かなくなり、遊びほうけました。心は暗闇を増すばかりでした。

　十年ぐらいたち私は墓地事務所にいました。坂東先生ご夫妻が大谷祖廟におりされて偶然に階段のところで先生のご尊顔に触れた瞬間に涙がぼろぼろと出ました。なぜだかわかりませんでした。今回こうして本を通しての出遇いであります。何か不思議なご因縁であります。こうして私は有縁無縁、に願いをかけられて呼びかけられて来たのです。いるのです。サッカーに逃げていた時ボールが眼にあたり、の手術をして四十数日間、砂枕で顔を固定して両目を眼帯で伏せていた時期がありました。昼夜の区別がなく沈んでいました。それでも、漫才のラジオをつけてくれと母に頼みました。心のどこかから「まだお前は逃げるのか」という不思議な声なき声に呼びかけられました。

　無始よりずっと反逆し、逃げて来た私です。もう如来さまの願いから逃げる必要がなくなりました。の中に

　これは最後の出生であって、もう、ふたたび生存をくりかえすことはない

　との釈尊のお教えがあります。不思議に静かなよろこびがあります。

和七年二月

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照　拝